



Title	報告Ⅲ
Author(s)	川井, 悟
Citation	OUFCブックレット. 2014, 5, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

報告 （川井悟）

プール学院大学の川井と申します。お手元にレジュメがありまして、ワープロを上手く使えないもので、誤字があるんですが、それは読んでもらうことにして。2部に分かれています。

本を作る時に浅野先生といろんな話をしたんですけども、結局、ともに20世紀の日本に生きているということが出発点ですね。現代のいろんな問題を考える際に、私達よりシニアの人達は、過去の中国だとか、或いは政治状況とか、或いは自分の利害関心とかに囚われる方が多い。特に、ちょっと前の世代は、政治に囚われる方が多いですね。政治の理想とか日本の進路とかを考える方が多いんですが、私たちはそれらからどちらかと言うと距離を置きます。そして、使えるのは科学だと思うんです。科学とか技術とか。そして社会とか人間を見る時も、その時の政治状況とかそういうものから離れた、人間観、或いは世界観、歴史観を作りたい。こういう考えがありました。科学と並んで、民主主義もよく言われます。でも、民主主義について考えると、否応なく、現実の政治に関わりを持たざるを得なくなる。お話を伺っていると、西村先生はネーション・ステイト、国民国家とか民主制とかに拘っておられる。ですから、私よりシニアな世代だと思っています。そして、私なんかより後の世代になると、ますます現実から浮遊しまして、思考の遊戯って言うんですか、そういうところに遊ぶ日本人が増えました。私はその先駆けではないかと思っています。

次に、浅野先生が私に託された『概説 近現代中国政治史』という本についての言い訳をこれから言います。これからあとは『概説』と略称します。まず、高い本なんですけれども、買って下さった、或いは読んで下さった凄く御奇特な方、ちょっと手を挙げて頂いたら。一部でもいいです。序章だけでもいいです。「おわりに」だけでもいいです。読んでいただいた方は手を挙げて下さい。ありがとうございます。

読まれた方は、変わった本だと思われたかと思います。中国の歴史書は、ここ数年たくさん出ています。中央公論からも岩波からも東大出版会からも

講談社からも出ています。私が一番面白いと勝手に思っているのは、菊池秀明さんという人の講談社から出ている中国の歴史という本ですね。太平天国の専門家の方なのですが、太平天国の洪秀全から話し始めて、それから次は孫文とか革命家の話をし、その前に洋務運動とかの話がありますね。それから孫文、それから毛沢東、蒋介石とか、西村先生お得意の張学良とかの話をします。事件を構成する人物中心に中国の歴史の大事なところを全部、語っていくんですね。凄く面白い。つまり歴史というのは、元々は人物の行動、事件史です。それを後から評価したり大きな流れの中で述べるというのが歴史書の本流だと思うんです。これを普通の歴史書というと思うんですね。私たちの『概説』の本は違うわけです。歴史上の事件とかは、どっか別の本で読めなさいと。それを知った上でこれを読んで下さい。こういう本なんです。初めて読まれた方は、そういうところが大変だったと思います。

近頃、いろんな歴史の概説書、「類書」って私は呼んでるんですけども、この10年以内に出たいろんな本は、私たちの先輩たちがかなり大きな道筋や代表的な人物について書いてしまっていて、同じことは書けない、そこで、研究の新しいところを紹介しなければということで苦労されている。岩波新書で、吉澤さんから始まって、川島さん、石川君とか、久保君とか、いろいろ書いておられますが、実は面白くないと私は思ってるんです。つまり歴史の面白いところを、同じところを繰り返すと嫌だから、自分の得意なところを中心に史料に基づいて書くということになると、全然、迫力がないんです。何を言ってるのか分からなくて。つまり、だんだん歴史研究は進むんですが、その分、細くなるというか問題が細分化されていく。それでおもしろくない。逆に、いちばん歴史を語るときに張り切っているのは予備校の講師じゃないでしょうか。ある程度の事実に基づいて勝手に脚色して、予備校生に好き勝手なことを教えている。生徒は、それが、よく分かる、おもしろい、初めて分かった、というわけです。高校の先生でそこまでやれる先生はいません。予備校の講師とか、或いはよく売れてる本は、本当に詳しくその時代のことを知らないで、面白いところだけを取り出して、歴史にはこんな面もありますよという。場合によっては、歴史を舞台にして現代人が考え

行動するような説明が売れるんですね。

『概説』はそういう歴史書を全部踏まえて、歴史としてどのようにして考えたらいいのかということを議論しました。「序論」というところで方法論とか、或いは西村先生が10年ほど前に政治空間の本の中で取り上げられた、パラダイムの転換というのをもういっぺん、徹底的に浅野さんにやってもらいました。そして、時系列に、解放前を私と内田尚孝君、それからその次、1949年革命から1978年、毛沢東の死あたりまでを浅野さん、その後は現代のことを軍事から見ている阿部さんというふうに分担して、時代のことをまずだいたい押さえてもらいました。しかし、一章あたりのページ数が凄く少ないんです。当初は、一人あたり30ページくらいだったと思います。のちに、書けないと言った方のページを取ったのと、もう1つはミネルヴァの方に、これは大事だからということでページを多めにしてもらってページ数を増やしました。それでも、私が担当した章は、清のアヘン戦争前後から1937年まで。100年間で40ページで述べるのは無茶苦茶、難しいんです。当初は誰も書けないような要約の決定版を書こうと思っていたんですが、『中華民国史』という中華書局から出た本がありまして、中国の歴史家が史料を元に1つ1つの事件や人物の動静を概説しているその档案の利用の仕方とかを見て、とても敵わないというので、要約の決定版という『概説』は諦めました。それでは、少ないページで、どんな時代別の概説を書けばいいのか。これが問題です。

読んで頂いた方は、いくつか問題を感じられたと思うんです。何故、第1章の川井のところには共産党史が全然、出てこないのか。毛沢東が生まれた話も、共産党の成立も、或いはその前の陳独秀も一切取り上げませんし、井岡山も出てきません。全部それは第九章を担当される田中先生に書いてもらうことにしました。第2次国共合作あたりの話は内田尚孝さんが日中戦争との関係の中で取り上げてくれました。重複を避けたというのが1つの理由ですけれども、私はその時、現実に統治権力を握っている政権と人々の生活世界の中での支配関係の変化が政治史であるというように考えて、後で政治権力を握ることになった毛沢東の生い立ちを辿るようなことはすまいと

考えたのです。例えば、オウム真理教事件の麻原彰晃が、今、天下を取っていたら、麻原彰晃さんの九州での歴史とか生い立ちを全部取りあげて日本史になるかということです。そんなことはない。大事なことは政権を取ってからだというように理屈を付けて、共産党は第1章から除きました。

あと特色としては、皆さんが違和感をもたれたかもしれませんが、参考文献をあまり挙げませんでした。研究文献として、だいたいみんな、こんな本が日本で出ていますよ、或いはアメリカや中国から出ていますよというように代表的な研究書を参考文献として紹介されるのですが、多分みんな全部読んでいないと思います。著者の皆さん、違っていたらごめんなさい。しかし少なくとも、文章の細部にまでこだわって読んでおられないと思います。そうした十分に読んでいないものも紹介されている。私はそういうのは避けたいと思いました。参考書は代表的なもの以外は一切、紹介しない。そして、この人の本だったら信頼してもいいという人の名前しか挙げない。もちろん、そういう人もすべての点で常に正しいわけじゃないし、小さな点はまちがいもある。しかし、人と社会についての史料の読み方、歴史的事実の構成の仕方がある程度考え抜かれているということです。歴史においては偶然的な傑作はありえない。歴史研究者が若い時にたまたま注目されるような論文を書けるのは偶然みたいだが、偶然ではない。それはたまたま言ったことが先輩に褒められて評価されているだけで。本当はいろいろな経験を積み、歴史資料を読んだ経験の中で勘が冴えて、「こう言っても間違いはない」ということが言えるという熟年に達して始めて良い歴史が書ける。そして年を取ったらだんだん忘れてきて、もう大事なことも忘れてしまうから、歴史は書けなくなる。そのちょうど狭間の、一番成熟した時に書いた歴史というのは一番勘が冴えていて信頼できる。

先ほど、田中先生が最初に問題提起されて、史料がいっぱい出るようになったということをおっしゃった。その史料の扱い方、或いは研究者としての自分の立ち位置、考え方、問題意識、視角の決定について、私は今の日本の状況というのは、史料がたくさん利用できる可能性が増えたとはいえ、却って危ういと思ってるわけです。日本が危ういだけじゃない。世界中が危うい。

或いは史料を使えないくせに使ったふりをする駄目なのがいっぱいいると思っています。また、後で言いたいと思います。

今まで言ったのは、ハンドアウト前半の「『概説』の编者として」の言い訳のところで、この『概説』という本がどういう特色を持っているかということのかいつまんで言ったわけです。それではたくさんあるレジュメを頑張って、あと5,6分で全部言えるようにします。

中国の20世紀の1920年代から1980年代ぐらいまでの政治の歴史を考える時にですね、どういうことが言えるのかということと共に、それを支える歴史の研究の仕方ということまで、私の考えを述べたいと思います。2の「私の、いくつかの論点」からです。いくつか論点を言いますが、全部言っていると大変なんで、いくつか飛ばして簡単に言います。まず1)の(1),「中国は資本主義かどうか」。私は形は資本主義だと思っていますが、内容が資本主義かどうかは資本主義の定義によるとと思っています。定義によっては社会主義ともいえる。要するに、まず、定義をはっきりさせましょうということです。(2)については、これは西村先生と議論したいと思います。ネーション・ステイトのグローバルなルールがあって、その枠組の中に中国は入っているから、それに入るというなかではネーション・ステイトビルディングの歴史なるものを、どのように辿るか、どう変わっていくかというふうな捉え方をされていますが、ネーション・ステイト、国民国家と私は言うんですが、その定義の仕方が問題だというのが私の考えです。中国の2000年の歴史を見ると、中国というのは昔から、他に強い勢力があったら、例えば、北から攻めてくるような少数民族の勢力があったら中華というのを意識しますけれど、他に強い勢力がなかったら「中華」なんて特に意識する必要はないのです。いろんな群雄の勢力があったら、その時は「国」なんていう言葉も使われる。言葉というのは非常にややこしいですね。日本人は「国」という言葉を中国から借りてますし、中国でも「国」という言葉が昔からあるから混同されるんですけども。

「国民国家」とか「国」とか「ネーション」とか或いは「ステイト」とは一体何なのかという定義を歴史的にやらなければいけないと思っており

ます。私の考え方は(2)に述べてある通りです。「国民国家」というのは近代ヨーロッパに出てきたものだった。それは名前じゃない、或いは国民とか領域とかじゃなくて、何をすることが大事である。支配の仕方、統治の仕方が大事で、例えば、支配領域の人々の、人口調査や、人をある程度掌握して、どんな政策をやるかによって国民国家になるのではないかと考えています。これはまた、議論したらよいと思いますが、こういう定義から入るべきだと言っているのが(2)です。

また、どうして中国はまとまったのか。或いは何故、1つ1つの省に分裂しないのか。或いは分裂と統一を繰り返すのは何故か。あとで、金子さんのお考えを聞きたいところですけども、どうして中国は昔から1つの政権だったのかは謎です。

2)「中国社会を説明する社会科学は・・・西欧などと共通なのか」にいきます。西村先生が、『概説』は中国異質論を言っているのではないかというお話でしたが、歴史や社会を説明する場合に普遍性は必要だと思っているんです。ただ、今のところ、十分共通の分析装置を社会科学は生み出していないと私は思っております。社会科学もっと頑張れということですね。ほんとは私がやりたかったんですが、もう寿命が来そうです。

3)「政治とは何か」で書いてあるのは、『概説』の第一章で何を取り上げたかということに関わってきます。私はマックス・ウェーバーの考え方を利用して、人を支配する、それを政治と同義に使っておりますので、社会のトップの方や国のトップが何の政策をやるというような意味だけじゃなくて、社会の各レベルの小さな世界でも、人が人に影響を及ぼし支配するというのを全部、政治と呼んでいるんです。ですからそれを全部解明できるのが政治学なんじゃないかと思います。そして、中国は昔から政治の世界だというように思っています。経済の加藤弘之君は、時々、中国の経済制度を問題にして、曖昧なのが問題で、市場が十分に独立して働かないとかいろいろ言っておられますけれども、中国は昔から経済も政治も分けないんです。経済面でも政治の力を使って自分を有利にするっていうのは当然です。元々、生きていくためには、みんな、人が人に影響を及ぼし、影響されるという意味で、

政治の世界に生きています。その中で 2 億の人を支配するか、10 億の人を支配するか、4000 万の人を支配するか、或いは 100 人の人を動かすかの力学が違っただけなんです。

次に、4)「統治 = 支配の正統性」にいきます。西村先生の本には、正統性(legitimacy)という言葉がいっぱい出て来るんですが、「正統性について調べなさい」というので、ある辞典を引きましたら、マックス・ウェーバーに行き当たりました。社会学の用語での正統性、支配の正当性という説明が多かったのですが、支配を続けるためにコストを安くする技術が正統性という概念だという説明もありました。私は、正統性という際に、それが表出され言説に載せられる時、4)の第 1、第 2、第 3 に書いたように、それが実際に表出されたとしても、それは極めて偏った面しか反映していないから、人々が無意識のうちに従っているような実際の支配の正統性を実証するのはかなり難しいと思っております。理論的な考察もいるし、それを実証するための方法が必要だと思っています。

5)「制度とは何か」は、浅野先生がドイッチュとスコチボルを挙げて、歴史的制度論というのを仰っておられるかと思います。私は歴史的制度論に近い考えなんですけれども、社会学者のスコチボルとはまたちょっと考え方が違う。物理学の考え方のアナロジーで説明しますと、ヒッグス粒子のように、空間と力というのは相関連していると思ひまして、制度というのは結局、人が人に影響をおよぼすのが政治だとしたら、人に影響を及ぼす時に、合理的な行動に抵抗し影響を与えるようなものが制度だと思っています。制度の中にはいろんな制度がある。強さも弱さも歴史的にもいつ出てきたとかいろんな制度があって、そしてそれが持続性を持つ時、制度として意識されるわけですね。そんな理屈を理論的に 5) に述べました。

5)の(7)～(8)は、歴史的な制度を考える時に、スコチボルの議論に対して私の考えを説明していますが、要するに、例えば中国の家族の中で、或いは、近隣社会の中で生きている人が、その時に考えられる一番合理的な、自分の利益になるような行動を取るとする。無意識的にとるとする。その時に、そのような行動をそのままの形で取らせないような力が働いたら、これ

は政治の力が働くか、或いは政治の力が見えない時には、制度的な力が働いてるんじゃないか。それを「制度」と言う。そんな話です。別に辛亥革命の時の話だけじゃなくて、共産党が政権を取った時でも、人々の末端のところ、人によっては政治の領域じゃなくて社会の領域だと言うんですけども、末端の領域で、政治の働きかけに対して、人々に影響を及ぼすものがある。昔から全然変わらないようなやり方、或いは制度が残っている。それがいつ頃変わるんだろうか。それが地域社会であり、地域社会の諸制度要因である。もちろん、省とか地方ごとにもある。更にいろんなところから代表が来て、全体の政治制度の仕組み、外に対して政権をどう争うかというような議論になった時に、それをどのようにまとめるかというのが変革を論じる際に制度論が論じている領域だと思うのです。ハンドアウトではここまでは展開していませんけれども、そういうふうには制度というものを考えています。

最後の6)「史料の扱いと歴史学」は、先のお2人があまり言われなかった史料のことについてです。ここで言いたいのは次のことです。田中先生は、1980年代以来、中国の方で档案というものの管理のやり方、つまり歴史資料と現用資料がどのように分けられるかはっきりしたので、これからは、いっぱい出されている史料を利用した歴史研究がやりやすくなる可能性が大いに広がると仰ったのですが、可能性が広がると共に、逆に危うさもあると思うんです。中国の正史執筆は次の時代の民間知識人がやるんですけども、唐の時代の太宗がいろんな学者を集めて、五胡十六国史をやったのは、次の時代の王朝が前の時代のことを執筆することになったので、歴史を歪めるものだと歴史学者の間で批判があるそうですね。それと同じことを共産党の人がやったら、これは歴史を歪めるものになるという意見が出て来ると思うんです。それは何故かと言ったら、そこに当然、作為が入る、改竄が入る。或いは「これは出す」「これは出さない」という選択がなされることで歴史が歪むということです。档案を使った研究について言えば、私は档案をいい加減に使った研究はほとんど意味がないと思っています。編纂された档案は読んでもいいと思うんです。しかしながら実際の文書にあたってですね、これが原文書だとか会議録だとかいって、それを事実というふう考えるのがそ

もそも間違ってると思ってるわけです。可能性は広げたが、危険性も同時に広げて、そしてそのままそれを信じて研究したら、危険性の罠にかかってしまう。歴史を歪める。或いはテーマを矮小化する。何のために研究するのか分からない。こういう危険があると思っております。だから、たまたま論文が出て何かを実証したとしても、レフェリー制度が今の日本ではいい加減で、その参考資料とか档案史料とかを全部点検して、レフェリー出来る人が日本ではないと思う。指導教授もそこまで出来ないから、そういうのを利用した研究っていうのは、本当に質が保たれているのか。或いは、実証されていても、それが果たして本当に意味があるのかどうかというのは難しいと思います。これは史料を読む力量の問題、或いは人間を理解する力の問題もあるんですけどね。岡本隆司さんと吉澤誠一郎さんが『近代中国研究入門』という本を出して、そこで、今の大学の教育では十分、若手に教育が行われていない、読む力がないと言っておられます。先程、浅野さんが言われた坂野先生のような偉い先生がだんだん少なくなったと言って嘆いておられますが、まだあの議論には足りないものがあると思います。人間の理解が足りない。

1つ雑談いたします。私がびっくりしたのは、東洋史の先生の中には、セックスの仕方を本から学ぶ人がいるわけですね。昔の人が書いた、偉い人の本や、いろんな生活のことを書いた本から学ぶわけです。日本の旧制中学や高校のエリートたちが読む古典の中には庶民の習慣を伝えてくれるものなど滅多にない。そこで、たまたま見つけた本の知識と学校時代の先輩や同級生の話と、結婚してからの奥さんや子供たちの話で人間理解の世界が完結している。そして、それを歴史上の人間理解に適用したのではないかと思うのです。つまり、昔の学者は世界が狭いと思ってます。今はいろいろな世界の情報が流通している上に、活動領域も広がっているわけですから、実践して、そこでいろんな体験をして人間理解を深める。そうでないと、行間を読んだり、書かれている日記や回憶やその他のいろんなことの内容が分からへんと思います。だから、『近代中国研究入門』という本は、昔の東洋学の先生方の勉強法をもっとせよと警鐘を鳴らしておられるんですが、私は、もっと幅

広くいろんなものを読み、いろいろ体験せよと言いたいのです。坂野先生がボールディングとか、キリスト教の本を読みと言われたのは流石だと思ったんですけども、さらに、いろいろな世界を見、いろいろな人とつきあう、そういう勉強が大事かと思いました。すいません、3分程超過しました。あとは本を読んで頂いたら。所々誤植があって申し訳ないんですが、言いたいことは言えてると思います。ありがとうございました。

水羽：時間制限の件、そんな真剣に言ったつもりはなかったんですが、かなり無理してまとめていただきました。この間、討議の時間を確保したいと思い、質問は一切、取らずに進めておりますが、個別の報告に対する質問、或いは大きな問題に対する意見を質問用紙に書いて頂いて、それを第2部の土田先生のほうでまとめて頂きながら、全員で議論できればと考えております。続けて、コメントということで、瀧口先生、宜しくお願い致します。一応15分ということで。